

スタッフルーム
Staff room

私の好きな世界をあなたに

おがわ もえ
小川 萌

(理工学メディアセンター)

幼い頃から本が大好きだった。幼稚園の頃から、開けばどんな世界にも行ける魅力にすっかり取りつかれ、同じ絵本でも飽きずに何度も読んでいた。小学校に上がってもそれは変わらず、むしろ漢字を読めるようになったことで私の本好きには拍車がかかった。国語の教科書に載る物語は配布されてすぐに読み終わり、二年生の頃、十数回の黙読の後『スイミー』を一言一句違わず暗唱し、担任の先生の度肝を抜いた。休日や放課後の遊び場は公共図書館で、当時の私には少し大きいカートを操り、毎度鞆が壊れるくらい本を借りた。書店に行き、両親に好きな本を買ってあげるよ、と言われれば、選んでいるうちに買いたい本をだいたい読み切っていた(立ち読みで済むなら買わなくても、とは思っても口には出さずに購入してくれていた両親に感謝である)。中学生になると図書室の先生と異様に仲良くなり、おすすめの本を片っ端から読んだ。高校生になるとさすがに部活や勉強が忙しくなり本を読む機会は減ったが、それでも受験期の息抜きは図書室だった。大学生の頃インターンをした書店で、大好きだった児童文庫のシリーズが完結したと知りその場で全巻購入。徹夜で号泣しながら読み切り、翌日目を腫らして出勤した。今でも通勤鞆にはだいたい文庫が入っているし、各キャンパスメディアセンターからの図書取り寄せにもお世話になっている。

そんな本好きな私にはお気に入りの一冊もあるし、好きな作家だっているが、知人に良いと思った本をおすすめするような、所謂普及活動はほとんどしない。もちろん聞かれたら答えはするし、以前働いていた書店で書評を書いたりしたこともあるが、自らこの本がすごくいいからぜひ!というような話は減多にしない。しかし最近、そんな私に普及活動をする機会がやってきた。初めての姪が誕生したのだ。親戚中集めても末っ子だった私にとって、初めて経験する身近な命の誕生は非常に感動するものだった。

もともと子供は好きなほうだが、身内の子供の可愛さは想像以上だ。笑っているときはもちろん、泣いていても何をしても、あくびやくしゃみをしただけで可愛い。2分間ひたすらしゃつくりを繰り返す動画を、何度飽きずに見たことだろう。かくして立派な親バカ、ならぬ叔母バカになった私は、彼女が楽しめるものを提供しよう、と兄夫婦に向けて赤ちゃん向け絵本の普及活動を始めたのだ。本を手土産に家を訪れては、この本はこんな本でね、赤ちゃんでも楽しめるようにこんなところが工夫されているんだよ、と熱心に説明している。兄夫婦は私の性格上、本をプレゼントされることは予想していたようだが、まさかそれが何度も続くとは思っていなかっただろう。だが可愛い姪っ子のため、少しくらい力んでしまうのは大目に見てほしい。当の本人はというと、今はまだ楽しめるわけもなく、ほぼ寝ているか泣いているかなのだが。

本離れ、活字離れが騒がれる昨今、姪が本に興味がなくなり、叔母の重い愛を受け取るのを嫌がる日も来ってしまうのかな…と、そもそも彼女が本に興味を持つ前なのに、おそらく5年くらいは来ないであろう未来を想像したことがある。彼女はこれからたくさんの世界を見て、たくさんの方に興味を持つのだろう。だが、私を知る本の世界の楽しさを少しでも伝えたいし、それを一緒に楽しんで、できれば大きくなって忘れないでいてほしいと思う。他に大切なものもできるだろうし、家の外で遊ぶことに夢中になるかもしれない。でも、どこにいてもどんな世界にも行ける素晴らしい存在があるということを知ってほしい、というのが、元書店員であり、現在は司書の端くれであり、彼女を愛する叔母である私の願いだ。あと少し経って、彼女がこの世界に初めて触れる時に楽しんでもらいたい。にこにこ笑って楽しむ姿を想像して頬が緩みそうになりながら、叔母バカな私は今日も書店の児童書売り場へと足を運ぶのである。